

政府の介入によるソーシヤル・ キャピタルの形成可能性に関する 理論的考察

権^{クワン} 慈^{ジヤ} 玉^{オク}

はじめに

社会に存在する「ネットワーク」、「信頼」や「規範」といった「目にみえないモノ」に着目し、これらが社会の成長、発展、開発にとって有用な「資源」、「資本」なのだと(1)いうのがソーシヤル・キャピタルの議論のエッセンスである(佐藤寛二〇〇一b:二)。その議論の基礎を展開したのはコールマン(Coleman 1988, 1990) やバットナム(Putnam 1993a, 1993b)らである。(2)途上国の開発援助というコンテクストにおいては、世界銀行を始めとする開発援助機関やエヴァンス(Evans1996a, 1996b)らによって(3)ソーシヤル・キャピタルの概念の実用化や役割に関する議

論が進められてきた。(5)

一方、開発ないしは開発援助という文脈では「外部者の介入」という視点が関わってくるため、その介入によってソーシヤル・キャピタルが破壊される可能性があるという主張(Coleman 1990)も展開されてきたが、一方では外部者の適切な働きかけによるソーシヤル・キャピタルの有益な働きの可能性(Putnam1993, Nugent1993, Evans 1996a, 1996b)も提示されている。コールマンは、ソーシヤル・キャピタルを破壊する主な要因として政府の介入を挙げ、政府の介入とソーシヤル・キャピタルの間をゼロ・サム関係で規定している(辻田祐子二〇〇二:一二四、Evans 1996b:3)。これに対し、エヴァンスらは、政府とソーシヤル・キャピタルの関係におけるシナジー構築の原理を開発のコンテクストに応用し、有効に活用する方策について論じている。

以上の議論から分かるように、外部者の介入とソーシヤル・キャピタルに関する従来の研究はコミュニティーのインフォーマルなネットワークが外部者の介入によって破壊されるといふ筋骨きか、外部者とのシナジー関係の構築という視点から議論がなされてきた。外部者とコミュニ

ティーの利害関係が絡み合う開発過程においてソーシャル・キャピタルが有効に活用される可能性を考察するうえでは、外部者とのソーシャル・キャピタルを一元的に対立関係として捉えるのではなく、「よそ者としての介入効果を發揮しようとする外部者と、それを最大限利用しようとするコミュニティの思惑がぶつかり合う現実」(佐藤寛二〇〇一a:五)をみる必要がある。その意味では、外部者とのシナジー関係に注目しているエヴァンスらの主張に賛同できる。しかし、その一方で、エヴァンスらが提示しているシナジー論は外部者の介入という「行為やコミュニケーション」の現実的な思惑がソーシャル・キャピタルの形成過程に与える影響がいかなるものであるか、また水平的・対等的な立場に置かれていない様々なアクター関係がソーシャル・キャピタルの実際の働きに与える影響はどのようなものか、という点に関する説明が不十分である。

そのため、筆者は政府とコミュニティ間のシナジー構築の原理を探る前に、まず、外部者によるソーシャル・キャピタルの構築のメカニズムを明らかにする必要があると考える。そこで本稿では、「力関係に関する考察」「ソーシャル・キャピタルの両面性」という問題意識から

外部者の介入によるソーシャル・キャピタルの強化・構築過程において考慮すべき点を論じていく。以上の検討を通して、外部者によるソーシャル・キャピタルの形成可能性を探るためには、外部者の介入やコミュニティの思惑、様々なアクター間の力関係がソーシャル・キャピタルの実際の働きやソーシャル・キャピタル同士の相互関係に与える影響をも考慮すべきである、という点が指摘されるであろう。

一 政府の介入とソーシャル・キャピタルとの関係

に関する議論―ゼロ・サム論とシナジー論

コールマンは、コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの形成・維持あるいは破壊に影響する要因として「小規模な閉じた関係における閉鎖性」、「安定性」、「政府の援助」などを挙げ、各要因がソーシャル・キャピタルの形成・減価に与える影響について論じている (Coleman 1990: 318-321)。そのなかで、コールマンはソーシャル・キャピタルを破壊する主な要因として政府の介入を挙げ、政府の介入とコミュニティのソーシャル・キャピタルの間をゼロ・サム関係で規定している。すなわち、政府のサービスが普及すると、個人は政府依存的になり、

ソーシャル・キャピタルの価値・必要性を認識しなくなる。その過程でインフォーマルなネットワークは縮小・崩壊し、ソーシャル・キャピタルは壊される、という論理である。

ソーシャル・キャピタルの議論の多くが、コミュニティ内部の規範、信頼、ネットワークなどを議論の対象として捉えてきたのに対し、コールマンの議論は、政府との関係にまで範囲を広げ、政府の介入がソーシャル・キャピタルに与える影響の一面を提示している点から評価できる。

しかし、以上のゼロ・サム論はまず、コミュニティと政府などのフォーマルな機関との間に存在し得るソーシャル・キャピタルの性格および必要性に関する議論を見逃している点に限界がある。コールマンはソーシャル・キャピタルの概念を「個人に協調行動を起こさせる社会の構造や制度」である (Coleman 1990: 304) と提示している。つまり、コールマンがソーシャル・キャピタルに関する議論において主に対象にしているのは「個人」であり、小規模のネットワーク内における協調行動から得られる個人の潜在的な利益がその議論の焦点であった (坂田正三二〇〇一 a・一四)⁹⁾。それゆえ、コミュニティと政府などを含む社会の様々なフォーマルなアクターとの間に存在するソー

シャル・キャピタルの性格や役割に関する議論がなされてこなかったのである。

まず、外部者とのソーシャル・キャピタルの性格に関して、グルータット (Grootaert 1998) は、コミュニティ内の水平的なネットワークだけではなく、垂直的な関係 (政府や行政と住民との間で形成し得る関係あるいはフォーマルな社会構造・社会制度など) もソーシャル・キャピタルであるとし、コミュニティと政府の間に存在するソーシャル・キャピタルの性格に関して述べている。

また、「結束型 (Bonding) ソーシャル・キャピタル」、「接合型 (Bridging) ソーシャル・キャピタル」という概念を用い、社会の様々なアクター間に存在し得る有益なソーシャル・キャピタルの有り様を説明する視点もある (Gittel and Viadal 1998, Narayan 1999, Woolcock and Narayan 2000)。そして、その必要性に関して、佐藤仁 (二〇〇一) は、これまでの中心的な焦点であった村の中心やその周辺で作用する「横の」ソーシャル・キャピタルだけではなく、村と政府や外部機関との関係、つまり、明らかに力の異なる集団同士の「縦の」の関係も視野にいれる必要性があると主張した。

さらに、政府と社会をゼロ・サム関係だけで捉えているコールマンの主張に対し、実証的な事例を通して両者のシナジー関係の構築可能性を提示している研究も登場し始めた。パットナム (1993b: 42) は、「ソーシャル・キャピタルとは効率的な政府の政策にとってかわるものではなく、政府が有効に機能するための前提条件あるいはその産物である」と論じ、政府とソーシャル・キャピタルをシナジー関係で捉えた。エヴァンス (1996a, 1996b) もシナジー論を展開し、コールマンのゼロ・サム論とは異なり補完的な視点を提示している。また、政府の介入によるソーシャル・キャピタルの破壊可能性を提示したコールマンの主張に対し、ソーシャル・キャピタルは適切な政府の働きかけによって構築され得るものでもあるため、コミュニティを補完する政府の役割は重要であると述べている (Evans 1996a: 1124-1130)。以上のエヴァンスの議論は、政府と社会が同一の目標を共有することによってポジティブな関係を形成する可能性を提示し、途上国においてソーシャル・キャピタルを短期間で形成する新しい可能性を提案している点から評価できる。

しかし、政府とコミュニティとのソーシャル・キャピ

タルの重要性や両者のシナジー関係の構築可能性を唱えている以上の議論は次の二点で理論的な限界を見せている。

第一に、「接合型」ソーシャル・キャピタルの重要性を指摘するに留まっており、明らかに異なる力関係にあるアクターの間に存在するソーシャル・キャピタルの性質に関する考察がなされていない。第二に、外部者によるソーシャル・キャピタルの構築のメカニズムに関する説明が不十分である。そこで、次の第二節では、以上の問題意識を基盤として外部者の介入によるソーシャル・キャピタルの強化・構築可能性を探っていく。

二 外部者の介入によるソーシャル・キャピタルの

強化・構築可能性の再考察

(一) 力関係に関する考察

エヴァンスは外部者とコミュニティが同一の目標を共有すれば、外部者の働きかけによって形成されたソーシャル・キャピタルが両者にとって有効な機能を果たすと想定している。しかし「介入」にはすでに「力」が働いており、外部者がコミュニティのソーシャル・キャピタルに働きかける過程で、外部者による「操作性」が働き、ソーシャル・キャピタルの性質が外部者の意図に適切なものへと

「変容」したり、コミュニティではなく働きかける側あるいはコミュニティ内の特定の権力者に「利用」される可能性がある。外部者によるソーシャル・キャピタルの形成過程において介入という行為がソーシャル・キャピタルの実際の働きに与える影響を論じる前に、まず、コミュニティ自体の性格を理解する必要がある。

第一の性格は、コミュニティ内に存在する不均等な力関係である。レヴィ(Levi 1996)は、コミュニティ内における異なる力関係に注目している。すなわち、水平的ネットワークの重要性を強調しているパットナム(1993⁹)に対し、パットナムはコミュニティ自体をあまりにもロマンチックに捉えている。そのため、コミュニティ内において知り合い同士の間にある緊密な関係は「信頼」のソースにもなると同時に、他のグループへの「不信」へとつながる可能性もあることを見逃していると指摘し、ソーシャル・キャピタルの議論における異なる力関係に注目する必要がある、と言及している。また、ビール(Beall 1997)は、インドにおけるストリート・チルドレンの問題を事例として取り上げ、コミュニティ内において資源に対するアクセスや権力構造から来る明らかな

「力」の差が存在するという現実を示しながら、ソーシャル・キャピタルの議論に力関係を取り入れる必要性があると論じている。

コミュニティ内の不均等な力関係に関する以上の議論を基盤とし、外部者の介入という行為がソーシャル・キャピタルの形成過程に与える影響について考察してみよう。例えば、政府や援助機関の農村開発プロジェクトの実践においてプロジェクトの促進の一環としてコミュニティ内の「協働」や「相互扶助」の原理を強調したとしても、このようなコミュニティの労働原理は外部者が意図した通りの結果→プロジェクトの促進→あるいはコミュニティ内の特定の権力者の意図を満たすには有効な資本として機能するかもしれないが、様々な多様性が存在するコミュニティの構成員全員にその利益を同一に与えるとは限らない。すなわち、「コミュニティの発展」という名目で「協働」や「相互扶助」のようなコミュニティ原理が外部者の意図に適切なものへと「変容」される可能性がある。また、コミュニティ内にすでに存在する様々な不均等な権力構造が外部者の介入によってさらに強化される可能性も考えられる。

第二に、単に「美しい自然と素朴な人間関係」(北原淳一九九六・七)から成り立っている場としてではなく、「人間の犠牲やコスト」(Jidi・七)を伴う場としてのコミュニティの性質に注目してみよう。すると、コミュニティの一致団結を強調する外部者の働きかけが「個我が集団に埋没した人間関係」(Jidi・十)を一層促進する結果を招く可能性も予想しうる。つまり、政府とコミュニティが同一の目標を共有した場合、介入される側であるコミュニティはその介入を外部の資源や情報へアクセスし得る機会であると認識し、それを最大限利用しようとするであろう。そして、そのような現実的な思惑はコミュニティの共同労働の原理やコストを伴う可能性をさらに高める。その結果、構成員は「コミュニティの発展」という名目の下でコミュニティと個人の利害関係を同一視し、コミュニティと個人の利害関係の不一致やトラブルを軽視する恐れがある。

次に、コミュニティと地方行政機関の間を結びつけるネットワークや信頼関係の構築過程において中央政府と地方行政機関の間の異なる力関係がソーシャル・キャピタルの働きに与える影響に関して考えてみよう。外部の情報や

機会へのアクセスの増大という意味でコミュニティと地方行政機関のような外部機関との信頼関係構築は開発過程において欠かせない重要な要素である。しかし、その一方で、中央政府に対する地方行政機関の独立性が確保されないまま、コミュニティと行政機関の間に信頼関係が構築されても、それが中央政府の意図だけを充足させる道具として「利用」される可能性は十分考えられる。

シナジー論者はコミュニティのソーシャル・キャピタルの有効な働き、つまり開発を促進するソーシャル・キャピタルの議論に焦点を当てているため、外部者とコミュニティの思惑がソーシャル・キャピタルの実際の働きに与える影響を看過していると思われる。両者に有用な働きをするソーシャル・キャピタルの活用を考えるうえで、様々な権力関係が絡んでくる開発現場において外部者とコミュニティの現実的な思惑がソーシャル・キャピタルの実際の働きに与える影響に関する議論をさらに加える必要がある。

(2) ソーシャル・キャピタルの「正」・「負」の機能に関する考察

「外部者に対する排除性」、「個人の事業機会や成功を阻

む、「個人の自由の規制や革新性の阻害」、「個人の成功や上昇志向を抑えつける圧力」など、ソーシャル・キャピタルの機能の両面性に着目している議論も登場した (Portes and Landolt 1996, Portes 1998, Adler and Kwon 1999)。⁹ 以上の議論は、あるソーシャル・キャピタルが「正」と「負」の機能を同時に果たせる可能性があるという点を提示している面で、外部者によるソーシャル・キャピタルの形成可能性を探るに当って、欠かせない重要な論点であると思われる。しかし、これらの議論はソーシャル・キャピタルの「正」と「負」の両面性を提示しているのに留まっておろ、それが「誰の視点から」また「どの面から」見るかによって「正」あるいは「負」なのかの判断基準が変わってくる可能性が高い、きわめて相対的な概念であるという点に関しては論じていない。これに関して佐藤寛(二〇〇一a・九)は、あるソーシャル・キャピタルがすべての場合に「良きもの」として機能するとは限らないため、ソーシャル・キャピタルが「目的限定的」なものであることを認識すべきであると述べている。

ポルテスらが提示している「正」と「負」の両面性は、以上指摘したように外部者がソーシャル・キャピタルの形

成過程に介入する際に留意すべき点ではあるものの、その判断基準が曖昧である。これに対し、ソーシャル・キャピタルを目的限定的・文脈限定的に捉えている論者の議論は、「誰のため」、「何のため」なのかという判断をはっきり示すことができるため容易な概念である。しかし、これらの議論はその判断基準が外部者の意図に沿ってすでに決まっている点を見逃している。すなわち、外部者の介入には、あるソーシャル・キャピタルが「誰のため」、「何のため」有効な働きをするかに関する外部者の判断がすでに関わってくる。そのため、外部者がソーシャル・キャピタルの強化・形成過程に介入する際には、外部者が認識する「正」あるいは「負」の判断基準が当該社会のソーシャル・キャピタルに対する「決め付け」になり、それが他のソーシャル・キャピタルに与える影響や当該社会全体に与える影響は何であるかまでを考慮しなければならない。また、あるソーシャル・キャピタルを構築しようとする意図から働きかけたが、形成される過程でうまくいかなかった場合には当該社会に負の経験が蓄積され、この記憶が次の開発努力を参加型で行おうとする場合には、村人がよりいっそう躊躇するという「負」のソーシャル・キャピタルとして機

能する可能性もある（佐藤寛二〇〇一a：二十九）。このような場合、外部者の介入によって形成されたソーシャル・キャピタルは「誰のため」、「何のため」にも役に立たない「負」のソーシャル・キャピタルの形成へとつながることになる。

以上、外部者によるソーシャル・キャピタルの形成過程においてソーシャル・キャピタルの「正」・「負」の両面性を持つ意味を考察した。外部者があるソーシャル・キャピタルに介入する際に、あるプロジェクトの実現という限定された範囲でソーシャル・キャピタルを捉えるのは、ソーシャル・キャピタルの「正」と「負」の相対的な面を考慮すると、現実的な選択である。しかし、外部者がその選択において自分の思惑だけに「正」の機能を果たすソーシャル・キャピタルを形成する可能性がある点、そして外部者の働きかけが失敗した場合には、外部者にとっても当該社会にとっても「負」の機能をするソーシャル・キャピタルの形成へとつながる可能性がある点を留意すべきであろう。

おわりに

本稿では、外部者によるコミュニティのソーシャル・キャピタルの強化・形成過程のメカニズムを考察した。開発過程における有効なソーシャル・キャピタルの働きを工夫するためには、開発現場における外部者とコミュニティの現実的な思惑がソーシャル・キャピタルの形成過程に与える影響を考慮する必要がある。そこで本稿では「権力の関わり」、「ソーシャル・キャピタルの機能の両面性」という問題意識から外部者によるソーシャル・キャピタルの強化・構築のメカニズムを考察してみた。このような考察を通して、開発現場において「外部者の視点」が関わる際に、それが既存のソーシャル・キャピタルに与える影響やソーシャル・キャピタル同士の相互関係に与える影響についても考慮することの重要性を指摘することができたと考える。

(一) Social Capital には今のところ定訳がない。訳者が何に注目するかによって「社会資本」、「社会関係資本」、「人間関係資本」など様々な形で訳されているが、訳語に関し

てはまだ議論の余地があると考え、本稿ではカタカナのままで「ソーシャル・キャピタル」という語で統一する。本稿で取り扱うソーシャル・キャピタルとは社会内に存在する信頼、互恵性の規範、ネットワークといったような要素からなるものであるというコルマンやバットナムの定義に基づく。しかし、ソーシャル・キャピタルが適用される範囲に関しては、「コミュニティ内の結束を強化させる働きをするもの(Bonding)」だけではなく、「コミュニティ外の他の集団や政府などのフォーマルな制度・組織との関係を強める役割を果たすもの(Bridging)」(Woolcock1998)までをソーシャル・キャピタルとして捉える。

(2) 本稿では開発援助を、「途上国の社会に対して特定の方角へと変化を促すことを意図して行われる外部からの介入」と捉える(佐藤寛一九九六:六)。

(3) 世界銀行を始め、イギリス国際開発省(DfID)、経済協力開発機構(OECD)、国際協力事業団(JICA)、現国際協力機構)などが開発におけるソーシャル・キャピタルの概念の実用化を目指した。各機関のソーシャル・キャピタルに関する議論は次を参照されたい。世界銀行: Dasgupta, P. and Serageldin I. eds. (2000) 'World Bank (2002)' Grootaert, C. and T. van Bastelaer eds. (2002) 'イギリス国際開発省: Carney, Ded (1998)' 経済協力開

発機構: OECD (2001) 'JICA: 国際協力事業団 (2002)。(4) エヴァンスを始め、Fox (1996) 'Heller (1996)などが開発におけるソーシャル・キャピタルの有効な活用に関して論じている。

(5) ソーシャル・キャピタルに関する議論の系譜は坂田正三(二〇〇一a:一章、二〇〇一b:四一七、二〇〇四:八章)、佐藤元彦(二〇〇二)、宮川公男(二〇〇四)を、世界銀行におけるソーシャル・キャピタル論の系譜はBebbington, Guggenheim, Oloson and Woolcock (2004)を参照されたい。

(6) 本稿における外部者とは、政府および開発援助機関のことを指す。外部者としての政府の位置づけは、政府とコミュニティの間が存在し得るソーシャル・キャピタル自体を否定する意味ではなく、開発援助という活動を通してソーシャル・キャピタルに変化を促すことのできる存在を意味する。

(7) 本稿における介入とは、当該社会をある特定の方角へと変化させることを目的とする開発活動のことを指すことにする。特に、その過程で当該社会のソーシャル・キャピタルの強化、活用、形成などに働きかける可能性を持つ政府や開発援助機関などの行為や活動のことを意味する。

(8) 本稿における「コミュニティ」とは、「村落共同体」

という範囲に限定せず、広い意味での地域的集団、地域社会として捉える。

(9) コールマンが提示しているソーシャル・キャピタルの概念は、パットナム (1993a) が主に論じている「水平的」関係よりは広い範囲までを含めている。つまり、ある社会内の組織やコミュニティ内に存在する「水平的」関係および「垂直的」関係までを議論の対象としている。しかし、その議論の範囲は政府などのフォーマルなアクターまでではなくていない (Grootaert 1998: 3)。

(10) 国際協力事業団 (二〇〇二: 事例分析編八十) が提示しているように、農業・農村開発においては、一般に他の課題よりも様々なアクターが絡んでくる。例えば、農民、地主、仲買人市場関係者の他、種子・農機具・農業・運送業者、農民グループ、女性グループ、農民組合、水利組合、農民銀行、地方行政機関などの様々な関係者が存在する。

文献リスト

日本語文献

北原淳 (一九九六) 『共同体の思想』世界思想社。
国際協力事業団 (二〇〇二) 『ソーシャル・キャピタルと国際協力―持続する成果を目指して (総論編および事例分析

編)』国際協力事業団国際総合研修所。

坂田正三 (二〇〇一 a) 「社会関係資本と開発―議論の系譜」『援助と社会関係資本―ソーシャル・キャピタルの可能性』佐藤寛編、アジア経済研究所。

(二〇〇一 b) 「社会関係資本概念の系譜―その議論はどこから来て、どこへ行くのか」『アジアワールド・トレンド』、四月号。

(二〇〇四) 「ソーシャル・キャピタル」『貧困と開発』絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生編、日本評論社。

佐藤仁 (二〇〇一) 「共有資源管理と「縦の」社会関係資本」『援助と社会関係資本―ソーシャルキャピタルの可能性』佐藤寛編、アジア経済研究所。

佐藤寛編 (一九九六) 『援助研究入門』アジア経済研究所。
(二〇〇一 a) 『援助と社会関係資本―ソーシャルキャピタルの可能性』アジア経済研究所。
(二〇〇一 b) 「社会関係資本概念の効用と限界」

『アジアワールド・トレンド』、四月号。

佐藤元彦 (二〇〇二) 「ソーシャル・キャピタル論と貧困緩和・解消」『脱貧困のための国際開発論』、築地書館。

辻田祐子 (二〇〇二) 「政府と市民のシナジー」『援助と社会関係資本―ソーシャルキャピタルの可能性』佐藤寛編、アジア経済研究所。

宮川公男 (二〇〇四) 「ソーシャル・キャピタル論—歴史的
背景、理論および政策的含義」『ソーシャル・キャピタル
—現代経済社会のガバナンスの基礎』宮川公男・大守陸編
東洋経済。

英語文庫

Adler, P. and Kwon S.W. (1999), *Social Capital: The
Good, The Bad, and the Ugly*, World Bank Social Cap-
ital Library, Papers in Progress.

Beall, J. (1997), "Social Capital in Waste — A Solid Invest-
ment?" *Journal of International Development*, Vol.9, No.
7, pp.951-961.

Bebbington, A., Guggenheim S., Olson E. and Woolcock
M. (2004), Exploring Social Capital Debates at the Wor-
ld Bank, *The Journal of Development Studies*, Vol.40,
No.5, June 2004, pp.33-64.

Carney, Ded. (1998), *Sustainable Rural Livelihoods:
What Contribution Can We Make?*, London: Depart-
ment for International Development.

Coleman, J. (1988), "Social Capital in the Creation of Hu-
man Capital," *American Journal of Sociology*, 94: Supple-
ment, pp.95-120.

——— (1990), *Foundation of Social Theory*, Cambridge,
Massachusetts: Harvard University Press.

Dasgupta, P. and Stiglitz I. eds. (2000), *Social Capital
: A Multifaceted Perspective*, Washington D.C.: The
World Bank.

Evans, Peter (1996a), "Government Action, Social Cap-
ital and Development: Reviewing the Evidence on Syn-
ergy." *World Development*, 24(6), pp.1119-1132.

Evans, P. ed (1996b), *State-Society Synergy: Government
and Social Capital in Development*, Berkeley California,
University of California at Berkeley.

Fox, J. (1996), "How Does Civil Society Thicken? The Po-
litical Construction of Social Capital in Rural Mexico." *World Development*, 24(6), pp.1089-1103.

Gittel, R. and Vidal, A. (1998), *Community Organizing: Build-
ing Social Capital as a Development Strategy*, Thou-
sand Oaks, Calif.: Sage Publications.

Grootaert, C. (1998), "Social Capital: The Missing Link?",
Social Capital Initiative Working Paper No.3, Washing-
ton D.C.: The World Bank.

Grootaert, C. and T. van Bastelaer eds. (2002), *The Role
of Social Capital in Development: An Empirical Assess-*

- ment*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Heller, Patrick (1996), "Social Capital as a Product of Class Mobilization and State Intervention: Industrial Workers in Kerala, India." *World Development*; Vol.24, pp. 1055-1071.
- Levi, M. (1996), "Social and Unsocial Capital: A Review Essay of Robert Putnam's Making Democracy Work," *Politics and Society*, Vol.24, No.1, pp.45-55.
- Narayan, D. (1999), *Bonds and Bridges: Social Capital and Poverty*, The World Bank.
- Nugent, J. (1993), "Between State, Market and Households: A Neoinstitutional Analysis of Local Organization and Institutions," *World Development*, Vol.21, No.4, pp.623-632.
- OECD (Organizations for Economic Co-operation and Development) (2001), *The Well-being of Nations: The Role of Human and Social Capital*, Paris: OECD.
- Portes, A. (1998), "Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology," *Annual Review of Sociology*, No.24, 1998, pp.1-24.
- Portes, A. and Landolt P. (1996), "The Downside of Social Capital," *The American Prospect*, No.26, pp.18-21.
- Putnam, R. (1993a), *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, New Jersey; Princeton University Press.
- (1993b), "The Prosperous Community," *American Prospect*, No 13 (Spring) : pp.35-42.
- Woolcock, M. (1998), "Social Capital and Economic Development: Toward a theoretical Synthesis and Policy Framework," *Theory and Society*, Vol.27, pp.151-208.
- Woolcock, M. and Narayan D. (2000), "Social Capital: Implications for Development Theory, Research, and Policy," *The World Bank Research Observer*, Vol.15, No.2, pp.225-249.
- World Bank (2000), *World Development Report 2000/2001: Attacking Poverty*, New York: Oxford University Press.

一〇〇〇五年 三月 一〇日 田中隆雄
 一〇〇〇五年 五月 十六日 レンジャーの審査
 をめぐって掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)